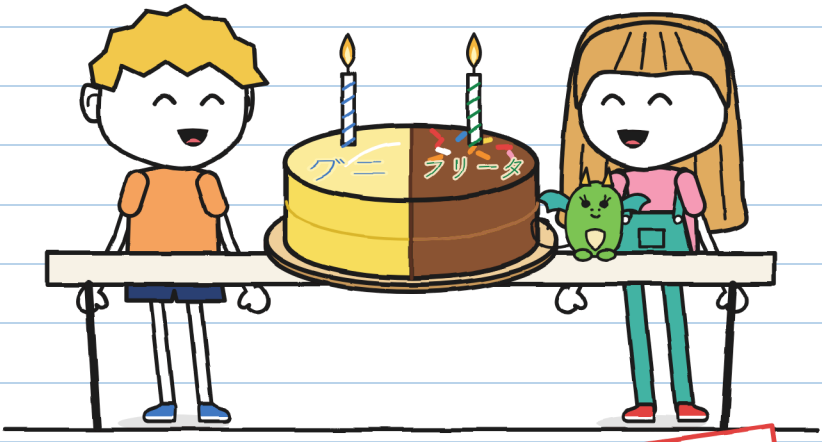
ありえない はいたつ・5

ふたりで ひとつの ケーキ

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ M
中級・9+

ありえない はいたつ・5
ふたりで ひとつの ケーキ

文と絵：LinguAula

サイズ M・中級・9+

日本語版：LinguAula

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

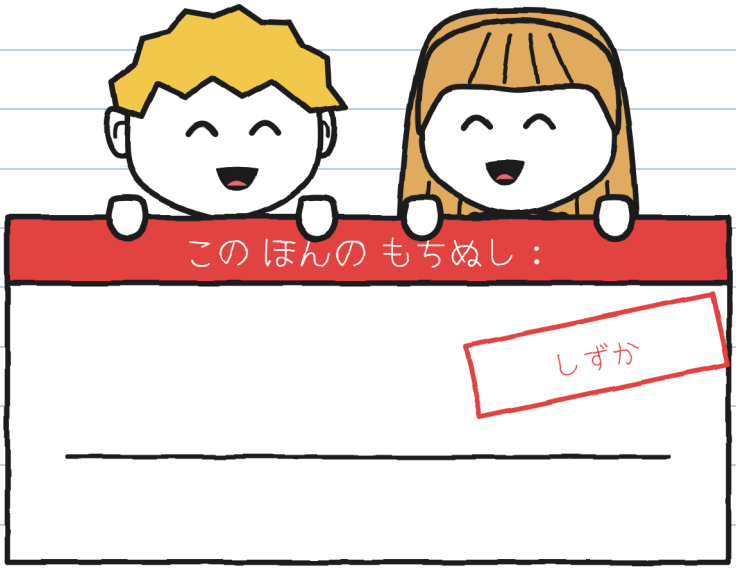
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズの5さつめ。これまでの本は「このにもつはかみつく」「かみなりまえにあけるな」「へんそう、おねがいします」「ここじゃダメ、パンくず！」。

LinguAula

linguaula.comでしょうごとにれんしゅう

この本を書いているあいだに、けがをしたケーキはない。二つに切られたのはある。 —J.



しずか。あけるまでは。 —J.

見つけたら返してね。サプライズなしで、持ち主に。

おはなしの なかだけ

このはんこは、お話の中だけで起きることのしるし。本当のドラゴンはいないし、本当の荷物は飛んでもどってこない。本当のパーティーは、76ページを見てね。 —J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。この ノートは グニの。しずかな ごごが すき。



フリータ。みどりで かいて、「J.」と サインする。おんがくの ある パーティーが すき。サプライズも。



トニョ。イナズマびんの はいたつやさん。じっぷんで とどかなければ タダ。はこばないのは、ずる。



マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶっている。いうより ずっと おおくを しっている。



エリアさん。まちの パンやさん。オーブンが ひとつ、てが ふたつ。



パンくず。ドラゴンの こ。ベラさんと くらして いる。ろうそくが すき。すきすぎる。



5ばんの にもつ。そとから みると、ほかと おなじ。ラベルには「はいる ところで くみたてる」と ある。



R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート5

しずか。



ノート4は、パンくずがぼくのスニーカーの中でねているところで終わった。これはケーキのアイシングみたいなピンク色で、やっぱり店のはんこがついている。

1ページ目に、言葉を一つだけ書いた。フリータは見せてとは言わなかった。さかさまに読んだ。

「しずか」と書くのは、これから何が待っているか知らない人だよ。 —J.

第1章

ふたつの しょうたいじょう

きのう、十六日の金曜日は、ぼくのたんじょう日だった。家でお母さんとお祝いした。レモンのパウンドケーキと、カップが二つ。だれも歌わなかった。かんぺきだった。

ちゃんと書きとめるために、そうちを発明した。



メーターが1のたんじょうびは、たんじょうびじゃない。おやつよ。 —J.

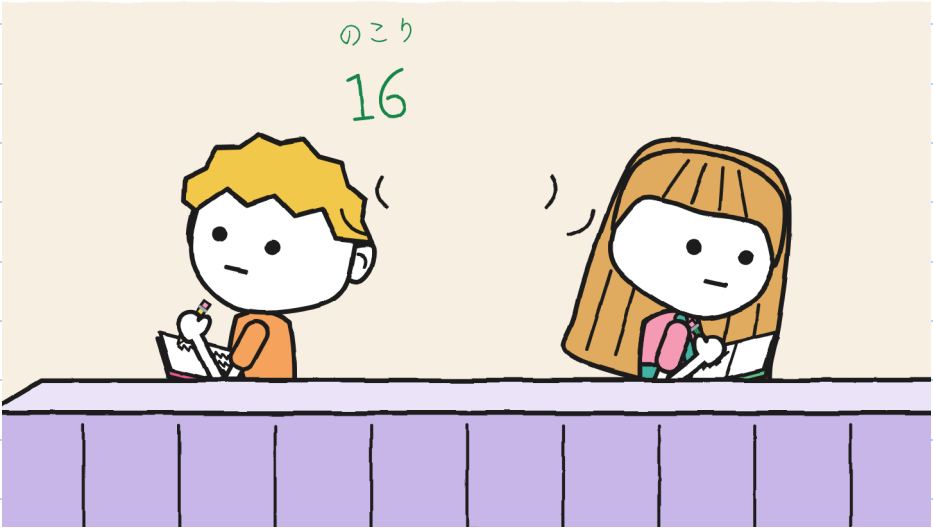
「二十一日の水曜日は、わたしのたんじょうび。いっしょにお祝いするって約束したよね」とフリータは言った。

「二十一日のあとで」とぼくは言った。

「二十四日の土曜日。5時に」

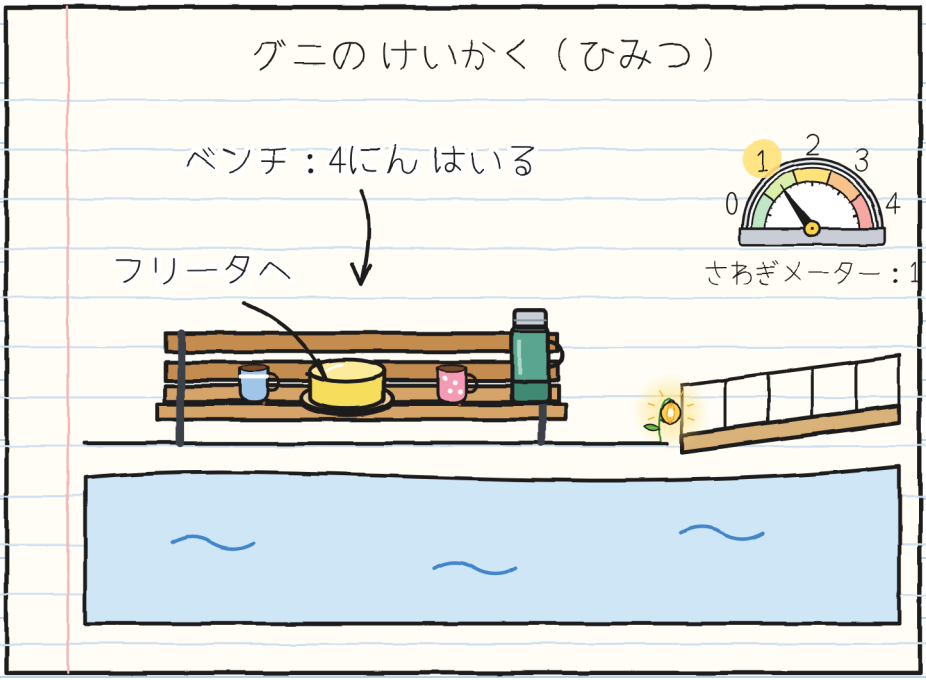
「5時に」

ふたりとも書きとめた。それ以上はだれも言わなかった。ぼくは、どんなパーティーになるのか、もう知っていた。フリータも知っていた。



ぼくが知っていたのはこうだ。フリータには、しずかな午後が必要だ。いつも走って、時間をはかって、しつもんばかりしている。板の橋のベンチで、音のしないおやつを食べれば、きっといい。

サプライズにするつもりだった。フリータは何もじゅんびしなくていい。来るだけ。



フリータの計画は、次の金曜日まで知らなかった。このページは、あとからフリータがぼくのノートに書いたものだ。

わたしが知っていたのはこう。グニには、本人が気づいていなくても、音楽つきの本当のパーティーが必要。聞いたら「いらない」って言うはず。だから聞かない。 —J.



昼に、トニョが配達からもどってきた。自転車を入口にとめて、自分の箱にすわった。ぼくは、しょうたいじょうが入った青いふうとうを四つ、わたした。
「一つは君の。ほかは、マラさんとベラさんとフローラの。フリータへのサプライズなんだ。言わないでね」
「サプライズなら、ひみつにしとくぜ」とトニョは言った。

トニョはふうとうを、見ないでリュックに入れた。



ぼくが食事に行ってから、フリータがトニョにみどりのふうとうを九つわたした。トニョが金曜日に教えてくれた。

「一つはあなたの。ほかは、マラさん、ベラさん、フローラ、エリアさん、アントニオさん、ゾエ、ブルーノ、それからくつ屋さんの。グニへのサプライズよ。言わないでね」

「サプライズなら、ひみつにしとくぜ」

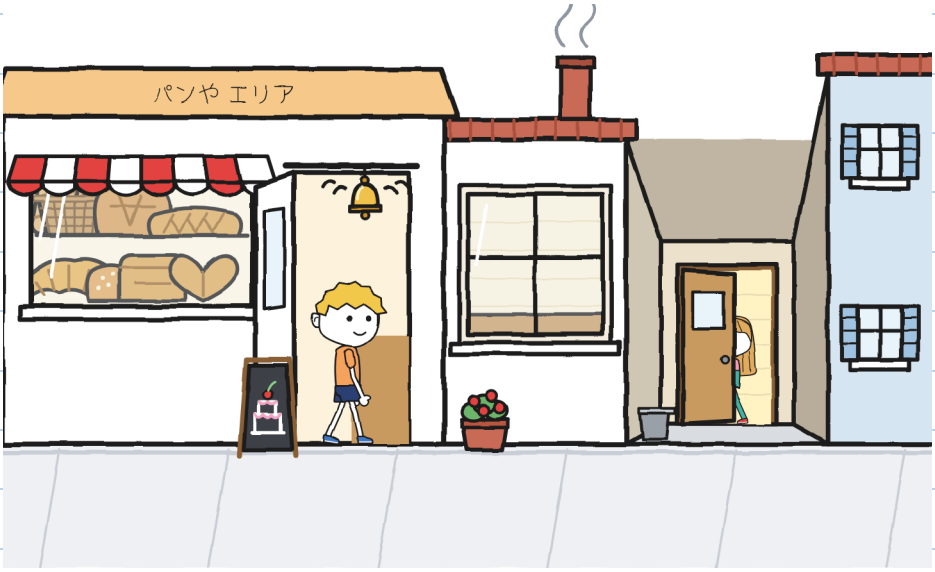
今度はトニョが、青いのとみどりのを開けた。同じことが書いてあった。二十四日土曜日、5時。

トニョから きいた はなし



夕方、ケーキをたのみにエリアさんのパン屋へ行った。入ると、台所のドアがしまる音がした。みどりのオーバーオールが見えた気がした。

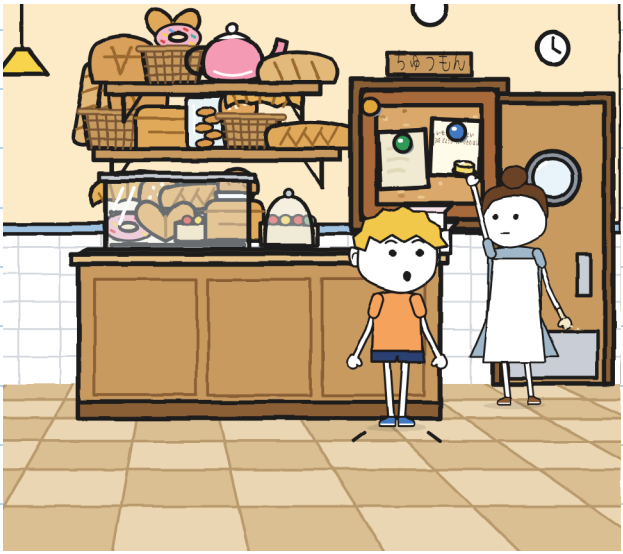
ほかのオーバーオールだろうと思った。



わたしのオーバーオールだった。エリアさんが台所から外へ連れ出してくれた。 —J.

「小さいレモンのケーキを」とエリアさんに言った。
「上には何ものせないでください。二十四日土曜日の5時、板の橋のベンチで使います。フリータへのサプライズです」

エリアさんは紙に書きとめてから、注文のボードを見た。そこにはもう一まい、うらがえしの紙があった。
「二十四日の土曜日、5時？その時間は、もうほかのケーキがあるの。ほかの場所でね」
「だれの？」
「ひみつ。あなたのひみつと同じ」



ほかの人のだろうと思った。十月はたんじょう日の人が多いから。

「ひみつは守るよ。もうひとりのお客さんのひみつもね」とエリアさんは言った。「でも、オーブンはひとつで、手はふたつ。土曜日の5時、ふたつの手はひとつの場所へ行く」

「もう一つのケーキは？」

「それは、たのんだ人たちで決めて。わたしはケーキを作る。パーティーは作らない」

メモした：「エリアさん：オーブン1、手2、場所1」



エリアさんは、わたしには次の日に言ってくれた。わたしも「たのんだ人たち」の意味がわからなかった。 —J.

ゆうがた　みせ　なかみ
夕方、店で、トニョがリュックの中身をカウンターにあけた。ふうとうを色ごとにそろえた。みどりはこっち、
いろ　あお　いちど　かぞ
青はあっち。それからもう一度数えた。
はな
「グニ、パーティーのこと、フリータと話した？」
「ううん。サプライズだから」
い　びん
「そうか」とトニョは言った。「イナズマ便では、あて
さき　ふた　にもつ　みせ　で
先が二つある荷物は店を出ないんだ」
さき　ふた
「あて先が二つって？」
い
「それは言えない。たのまれたんだ」



トニョは、どちらの色も一通ずつ、リュックのポケットにしまった。
「この二つはおれのだ」と言った。「ほかは月曜日にとどける」

マラさんは、たなのいちばん上から5番の箱をおろした。ほかの箱と同じだ。中で、木の何かがミシッと鳴った。
「エリアが5時に来る」と言った。「やっとね」



ポケットにふうとうが二つ。どちらも、相手のことを知らない。
ふうとうのことよ。 —J.

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは六つあって、3さいから16さいまで。ことばは20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**はページも絵も同じ。**XL**は小説。ちがうのは話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
ひらいた ノートが みえる？

サイズ XS · A1
1ページめに ひとこと かいた。フリータは さかさまに よんだ。

サイズ S · A2
1ページめに ことばを 一つ 書いた。フリータは 見せてと 言わなかった。さかさまに 読んだ。

サイズ M · B1
1ページ目に、言葉を一つだけ書いた。フリータは見せてとは言わなかった。さかさまに読んだ。

サイズ L · B2
1ページ目に、言葉を一つだけ書いた。フリータは見せてとは言わず、さかさまのまま読んだ。

サイズ XL · B2–C1
イラスト小説・13+
CEFRのレベルは目安です。

じぶん　　おな
それぞれ自分のサイズで。ケーキは同じ。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comでしょうごとにれんしゅう